

目次

ページ

特別講演会	・高齢者の都心居住のための都市環境整備(近藤 光男 氏).....	1
第1回都市計画研究会	・都心部における生活交通とまちづくり(増田 泉子 氏、加藤 文教 氏).....	4
第2回都市計画サロン	・諸外国における公共空間の修景・活用事例(繁 喜博 氏).....	6
第3回都市計画サロン	・公民連携プロジェクトへの取組(武田 浩 氏).....	8
第2回幹事会	10
ホットコーナー	・ウズベキスタン旅行で見たイスラム建築と都市景観(杉恵 頼寧 氏).....	11
会員紹介	・石村 壽浩 氏.....	15
今後の活動計画	15
編集後記	16

特別講演会

テーマ:高齢者の都心居住のための都市環境整備
-徳島市における生活環境施設整備を事例として-

日時:平成20年7月26日(土)15:30~17:30

場所:コンフォートホテル広島 会議室A

講演者:近藤 光男 氏(徳島大学大学院 教授)

主催:(社)日本都市計画学会 中国四国支部

参加者:21名

先生は、日頃から地方都市の抱える様々な課題をどうしたら解決できるかということに力を入れた研究を進めておられ、今回は、徳島市の中心市街地を対



象に昨年度から始められ、現在も進行中の共同研究において、この1年間で得られた成果についてご講演いただいた。

【講演の要旨】

人口減少と高齢化、多くの地方都市ではこの現象が顕著であり、中心商業地の衰退と相まって、都市の活力の低下が、大きな問題となっている。とは言うものの、このような地方都市の都心部においては、まだ高齢者の生活の場としての機能は十分存在している。このことを踏まえ、高齢者の都心居住を進めることが都市の活力を取り戻すことに貢献できるという考えに基づき、高齢者の都心居住に必要な生活環境施設の整備に着目した都心整備の方策について研究を進めている。

今回は、徳島市の中心市街地において、高齢者が歩いて暮らせるような空間を創造するための計画情報として、高齢者の意識調査に基づいて、生活環境施設の配置を計量的に評価するための手法や得られた分析結果についての事例を紹介する。

【講演内容】

1. 地方都市が抱える問題



〔講演資料P.8より〕

徳島市と同程度の規模の地方都市の抱える問題として

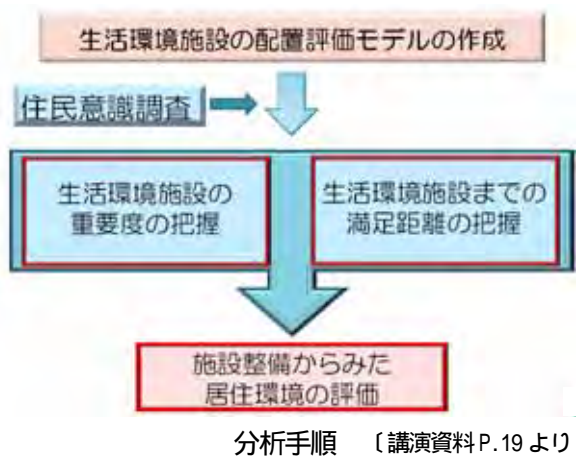
- ・都心部における人口減少
 - ・中心商業地の衰退
 - ・高齢化の進行
 - ・公共交通機関の利便性の低さ
 - ・移動手段を確保できない高齢者の存在
- 等があげられる。特に、高齢者の都心居住という視点で捉えた場合、徳島市においては、以下のような実態がある。
- ・高齢者は、主として、「買物」、「社交・娯楽・食事」、「通院」のために外出している。
 - ・自動車免許を所有しない高齢医師の外出率は約5割。
 - ・公共交通機関の空白地域に住む高齢者は外出機会に制約を受けている。
 - ・大多数の高齢者は、外出することに喜びを感じている。
 - ・都心部には、医療施設、娯楽施設、文化施設等の生活関連施設が、まだ存在している。

2. 問題解決の一方策と課題

高齢者の都心居住を促進させることは、都市の抱える問題の解決の一方策であり、今回は、「高齢者が歩いて暮らせるような生活環境施設整備」という話題について紹介する。

3. 都市施設整備からみた居住環境の計画と評価

本研究では、利用者の意識を反映した都市施設整備の評価法を用いた。高齢者を対象とした住民意識調査を実施し、「どのような施設が重要か(施設重要度)」、「どのくらいの距離に施設があればよいのか(満足距離)」という2つの評価指標を用いて、高齢者が歩いて暮らせるような都心地区での居住空間の創出に活かせる「生活環境施設の配置評価モデル」を作成した。分析の手順は図(次頁)のとおりである。



また、生活環境施設の配置からみた居住環境の評価モデルは、式(1)のとおりであり、それぞれの変数について調査を行った。

$$U = \sum_k^n a_k \cdot P_k(z) \quad (1)$$

- ただし、 U : 総合評価値 (0 U 1.0)
 a_k : 都市施設 k の相対的重要度
 $P_k(z)$: 居住地から施設 k までの距離が z のときの満足率
 n : 施設の種類の数

住民それぞれの満足距離は異なるという定義のもとで、施設 k の配置距離 z と満足率 $P_k(z)$ の関係は、ワイブル分布関数を用いると式(2)のように表せる。

$$P(z) = \exp(-z^2/\quad) \quad (2)$$

ただし、 : パラメータ

4. 都心居住に関する高齢者の意識

あらかじめ設定した17施設についての「施設の重要度」、「施設の満足距離(徒歩、徒歩以外)」に関する質問を中心に、都心居住の意向、近所づきあい、住居費、個人属性等についてアンケート調査を行い、徳島都市圏に住む高齢者に対する分析を行った。

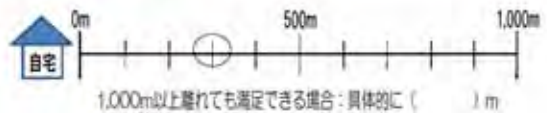
特に、施設の重要度や施設の満足距離に関しては、高齢

者が質問の意図を理解しやすく、回答しやすい方法を工夫した。以下に、その一例を示す。

施設の満足距離に関する質問

あなたが自宅から、以下に示す都市施設まで徒歩で行く場合、どのくらいの距離であれば、満足できますか。例に示すように、数直線上に、満足できる最大の距離に○をおつけください。数直線上の距離以上でも満足できる場合は、具体的な数字を記入してください。

【例】対象となる都市施設が、自宅から徒歩で300mまでの距離なら満足できる場合



[講演資料P.28より]

高齢者に対する分析ケースとして、「高齢者全体を対象にした分析」と「都心居住を希望する高齢者(全体の35%)を対象にした分析」を行った。

評価関数に關係する、施設の平均重要度 w (1 w 9)について、以下のような特徴がみられた。

- ・警察・交番(高齢者(全体): 6.64、高齢者(都心居住希望者): 7.03)や郵便局・銀行(高齢者(全体): 6.48、高齢者(都心居住希望者): 6.97)が高い値を示した。
- ・飲み屋街が最も低い値であった。
- ・同じ業種の施設でも重要度に多少の差異がみられる。
- ・より生活に密着した施設の方が、重要度を高く設定する傾向がある。

5. 都市施設の配置評価モデルの作成

施設の相対的重要度の算出は、式(3)による。

$$a_k = \frac{W_k}{W_1 + W_2 + W_3 + \dots + W_n} \quad (3)$$

- ただし、 a_k : 施設 k の相対的重要度 (0 < a_k < 1)
 w_k : 施設 k の平均需要度 (1 w_k 9)
 n : 施設(の種類)の数

また、式(3)に示した施設の配置距離に対する満足率モデルの両辺の対数をとると、式(4)が得られる。

$$\ln(P(z)) = -z^2/\quad (4)$$

式(4)を用いて、住民意識調査より得られた施設までの距離 z に対する満足率 $P(z)$ に関するデータに基づいて、回帰分析によりそれぞれの施設のパラメータを推定した。

これによって、満足率が80%となる施設までの距離(m)を算定した結果、次のような結果が得られた。

- ・警察・交番が最も短く都心居住希望者では350m。
- ・重要度が高い病院関係施設では、医院が病院より短い。(都心居住希望者では医院が377m、病院が486m)
- ・コンビニエンスストアは、重要度は低かったが、距離は短い。(都心居住希望者では389m)

このように、都心居住希望者では、すべての施設において500m未満の距離となり、施設整備をするために必要な計画情報が得られた。

満足率が80%となる施設までの距離 (m)			
	高齢者 (全体)	高齢者 (都心居住希望者)	全年齢
病院	476	486	524
薬局	391	377	400
介護施設	402	399	483
スーパー	397	375	390
コンビニ	401	389	427
大型ショッピングセンター	600	485	548
商店街	420	439	488
都市内の公園	425	419	419
図書館・学習施設	459	469	469
警察署・交番	389	350	420
公民館	415	389	496
郵便局・銀行	392	394	367
音楽・芸術ホール	499	472	566
コミュニティ施設	405	381	428
スポーツ施設	454	435	509
飲食店	437	402	486
飲み屋街	520	499	563

〔講演資料P.42より〕

6. 既存市街地の居住環境の評価(モデルの適用)

徳島市内の既存市街地において5箇所を選び、その地点から施設までの距離(m)に基づいて総合評価点を算定し、本評価モデルの適用性について確認した。



〔講演資料P.43より〕

評価結果を考察すると、以下ようになる。

- ・徳島駅に近い地点の評価値が高くなっているが、全体的な評価値が、0.7を下回っている。
- ・施設の中には、徳島駅から2km以内に施設が存在していない場合があり、評価値を下げている。

7. おわりに(成果と課題)

これまでの研究で得られた成果は、以下のとおりである。

- ・住民意識調査のデータを用いて、高齢者を対象とし、歩いて暮らせるまちづくりのための生活環境施設の配置評価を行うことができる評価モデルを作成した。
- ・高齢者からみた施設に対する重要度および配置距離に対する満足率を把握することができた。
- ・評価モデルを徳島市の中心市街地に適用した結果、現状では徳島駅に近い中心部の評価値が高くなる結果が得られた。

また、高齢者の都心居住を進めていく上で、次のような課題があげられる。

- ・高齢者が住みやすいコミュニティづくり。
 - ・高齢者の経済力の調査・分析と、それにあった住宅の整備。
 - ・高齢者の都心居住がもたらす効果分析。
- さらに、現在、次のようなことに取り組んでいる。
- ・都心居住エリアの適地の検討
 - ・居住エリアの整備手法の検討

【質疑応答】

どこまで細かい分析を行っていくのが妥当かという問題はありますが、新たな指標を取り入れた評価関数の適用や様々な観点での分析の可能性について、以下のようなコメントがなされた。

- ・アンケート調査結果を活かし、高齢者の体力的な個人差を反映した評価関数の適用が望まれる。
- ・移動手段として、公共交通機関の利用も考慮した分析が必要ではないか。
- ・現在の居住環境の違いを反映した分析も有効である。
- ・中心市街地の活性化という観点で考えると、高齢者以外の幅広い年齢層での意識調査を行うことにより、総合施策等への展開も期待できる。
- ・高齢者の経済力と居住可能エリアの設定による補助金制度などの施策検討にも役立つのではないかと。
- ・都心の居住環境を評価する時に、大型ショッピングセンターの取り扱い方を検討する。

(文責：長谷山 弘志)

評価結果



〔講演資料P.44より〕

第1回都市計画研究会(2008年度)

テーマ: 都心部における生活交通とまちづくり

- 広島市内の自転車交通を中心に -

日 時: 平成20年8月30日(土) 13:30~16:00

場 所: 広島市まちづくり市民交流プラザマルチメディアスタジオ
プログラム:

講演1 空前の追い風 生かすも流されるも

増田 泉子 氏(中国新聞社)

講演2 ひろしま流自転車まちづくりを考える

加藤 文教(株式会社 福山コンサルタント)

主 催:(社)日本都市計画学会 中国四国支部

共 催: 共催: 日本福祉のまちづくり学会 中国四国支部

参加者: 33名

2008年度の都市計画研究会は、「生活交通とまちづくり」をメインテーマに、都心部・郊外部・中山間地域といった地域毎に4回の開催を予定しています。今回(第1回)は都心部を対象に自転車に着目し、「広島市内の自転車交通」について講演・意見交換が行われました。

講演1の概要: 増田 泉子 氏

「都心部における生活交通とまちづくり」という題目で、自転車利用の現状とソフト面、ハード面での対策について、話題提供していただいた。



1. 現状

自転車の話題が、最近1、2年で露出している。

中国新聞でも、今年5月までの自転車の売上げが前年の50%に達したという記事が掲載された。その多くはマイカーの乗り換え組だという。また、ネパールにおいても、凹凸の道を走るのにちょうどいいマウンテンバイクが流行し、売れているという記事も取り上げられた。

公共交通をどうつなぐか、といった議論は10~20年前からされてきているが、最近は、特に自転車の問題が多く取り上げられている。自転車の問題を考えるには“追い風”が吹いている。これまで乗っていない人が乗り始めるといういろいろな問題が見えてくる。問題を考えるタイミングは今であり、対策を間違えると自転車利用の歯止めになる可能性も秘めている。

2. ソフトに軸足

自転車の問題もハード面とソフト面がある。いつも議論の最後には駐輪場の話になるが、ベストな解決策はない。自転車に乗っている人は、目的地の目の前に行きたいという意向が強い。つまり、自転車を止めて歩くということは想定していない。限界に近い「ドア・トゥー・ドア」を求めている。

では、何をすればよいか。ブームだからこそ軽薄なことでき、簡単なことから取り組みやすいのではないか。今が

チャンスである。例えばメディアを利用してエコをアピールしたり、イベントを開催する。

では、どういう人たちを巻き込むか。自転車購入者は自転車専門店でちゃんとした自転車を買って、その後も修理などを通じて自転車専門家と付き合いしていくことが、継続的に自転車を利用していくためには重要なことである。その自転車専門家をイベントに巻き込んで、自転車の面白さ、楽しさを伝えていくことが重要である。

広島市本通りの裏通り「裏袋」では、自転車専門店の出店も見られ、まちづくりや清掃などの活動が始まっている。最近1、2年で動きが活発化し、グループとしての姿が見え始めている。

今年4月には「自転車マップ」が作成され、今後も更新していく予定である。以前にもみんなで歩きながら、店のトイレなどの位置をチェックし、「子育てお出かけマップ」を作成したことがある。作成後は非常に好評で、情報を更新しさらに増刷した。お金をかけずに効果的な取り組みが必要である。

このような活動から、教育、啓発、モラル、ルールについて考える環境ができるのではないか。



自転車マップ (社)建設九州九州協会中国支部自転車まちづくり研究会作成

3. ハードでは

福岡市のように、自転車専門のセクションにおいて、自転車政策について取り組んでいく必要がある。自転車乗りや自転車に興味があって、まちづくりが好きな人を配すると変わるのではないか。

駐輪場については、植木の切り欠きやポール仕切り、駐車場の一角を利用した「ちまちま駐輪場」が必要である。企業においても、職場で社員がどこに自転車をとめているかなどに目を向けてほしい。

【意見交換】

意見交換では、自転車が利用しやすい環境づくりのため、社会全体で意識を変えていかないといけない、利用目的別、立場別などに分けて課題を整理していく必要がある、WSなどの実動レベルの取り組みが求められる、などの意見が出された。

(文責: 石村 壽浩)

講演2の概要：加藤 文教 氏

広島市内の自転車の現状や他都市での自転車を活用した事例について、具体的な調査結果を交え以下のような話題提供をしていただきました。



1. 自転車を取りまく現状

「安全・安心のニーズの高まり」「高齢者の自転車事故の増加」「自転車需要の高まり」から自転車・歩行者のための道路整備が求められている。あわせて、自転車ルールの周知・徹底、マナーの向上も重要な課題となっている。

自転車のための道路整備が遅れている原因として、交通計画のマスタープランで自転車が十分に考慮されていないという点が挙げられる。自転車ルール・マナーの周知・徹底に関しては、道路交通法の改正で自転車の歩道通行の秩序化が図られているが、通行に際しては個人の判断による部分が大きく、十分に効果が発現するかはあいまいな面が残されている。

2. 取組事例

自転車走行環境

自転車の走行環境、主に自歩道上での整備として、岡山市・仙台市・広島市では、歩行空間と自転車走行空間を植樹や路面表示などで明確に示し分類することで、両者の混在による事故を低下させるための効果を得ている。

駐輪場

駐輪対策については駐輪場の場所や数など、課題はたくさんあるが、市民ニーズを満たす広島市内の新しい取組として、平和大通りでは駐車場として利用していた場所を駐輪場として整備しなおした事例がある。また八丁堀交差点付近では、歩道の一部に駐輪スペースを設置している事例もある。

レンタサイクル

パリ市のペリブ(コミュニティーサイクルシステム)は民間運営の成功事例である。レンタサイクルの運営費は利用料と広告費でまかなうことができ、市からの支援はほとんどないといわれている。

レンタサイクルについては、H12年に広島市内でも社会実験が行われている。しかし、市内バス・電車との競合が顕在化したことや、市内の自家用自転車の削減には効果がなかったため、実現には至っていない。

3. アンケート結果からみる自転車環境の実態

都心部商店街アンケート(H18.10)では、各商店の駐輪場保有割合は、来客用6%、従業員用18%と設置率が低いことが伺える。また、自転車利用促進には4割弱が賛成しているが、駐輪場確保が難しいことを理由として、消極的な意見が見られるのも現状である。同じく、市民に対して行ったアンケートでは、74%が街中での自転車利用に賛成して

いるが、自転車専用道がない、歩行者通行量が多いなどの不満を持っていることも明らかとなった。また、自転車の利用距離は5kmまでが63%であった。昨今のガソリン代の高騰、自転車ブームを考えると、現在はもっと自転車利用距離が増加していると思われる。

4. ひろしま流自転車まちづくりのあり方のキーワード

ひろしま流自転車まちづくりのキーワードは、「自転車ユーザー、商店街、市民、行政のニーズ、自転車への思いなどの集約」であり、これらを「推進するためのキーパーソン、プラットフォーム」ができること、そして、「動き出すためのトリガー」。ガソリンの高騰、環境問題、健康志向など、機会を捉えて動き出すことを期待している。また、自転車利用のルール遵守やマナー向上を推進する、自転車版MM(マナー・マネジメント的活動)の取組が望まれる。

【意見交換】

- ・社会全体が自転車への思いやりが少ないように感じる。思いやりを持つような意識改革を促すことが重要だと考える。
- ・都市交通の中で、自転車交通を明確に位置づけることが重要である。
- ・キーパーソンとして都心の裏通りの商店街の人々のほかに、自転車好きのNPOを立ち上げることで自転車利用の活性化が図られるのではないだろうか。
- ・商店街が共同で駐輪場を使用するなどの仕組みも考える必要がある。
- ・一定のエリアをモデル地区(特区)に指定して、自転車にやさしいまちづくりを実践してみてもどうか。
- ・ひろしま流自転車のまちづくりを具体化するためのさまざまな視点(利用目的・立場・空間・利用時間・ルール・効用など)での問題点・課題の整理と、経済性とのリンクが重要な視点となる。



【感想】

自転車を取り巻く環境は十分とはいえないのが現状です。しかし、「環境が整備されていないから自転車には乗れない」ではなく、まず、自分なりの自転車の乗り方・楽しみ方を見つけ、そこから市やまち・環境を変えていくこと、そして自転車の追い風が強い今こそが、そのチャンスだと感じました。この研究会を通して、広島市での自転車利用のあり方の議論が活発化することを期待します。

(文責：山根 公八(株)福山コンサルタント)

第2回都市サロン(2008年度)

テーマ：諸外国における公共空間の修景・活用事例

日時：平成20年8月29日(金)19:00~21:00

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ 研修室C

講師：繁喜博氏(広島市都心活性化局観光交流部)

主催：(社)日本都市計画学会 中国四国支部

参加者：22名

中四国支部では、都市計画サロンと称し、気軽に集まれる講演会を年に3回程度行なっている。

「諸外国における公共空間の修景・活用事例」という題目で、世界100カ国を回って自分の目で公共空間を確認して来られている広島市都市活性化局観光交流部 繁喜博氏に、現地で撮影された写真を中心に世界の公共空間の事例を類型化したものを講演していただいた。



「諸外国における公共空間の修景・活用事例」という題目で、世界100カ国を回って自分の目で公共空間を確認して来られている広島市都市活性化局観光交流部 繁喜博氏に、現地で撮影された写真を中心に世界の公共空間の事例を類型化したものを講演していただいた。

講演の概要

1. 諸外国の名園

キューケンホフ公園(オランダ)

- ・オランダアムステルダム南西40kmのリッセ近郊に位置
- ・世界最大のチューリップ公園
- ・春の3月末~5月末までの2か月間のみ公開
- ・1949年球根栽培業者の商品展示場として造成
- ・100種450万本のチューリップのほか、アネモネ、ヒヤシンスやユリなど、4,000種700万株の球根を使用

ミラベル庭園(オーストリア)



- ・オーストリア・ザルツブルクにある庭園
- ・フィッシャー・フォン・エルラッハの設計により1690年に完成
- ・旧市街とホーエンザルツブルク城が借景となるように巧みに設計
- ・美しい芝生と色鮮やかな模様花壇が特徴

ヴェルサイユ庭園(フランス)

- ・フランス・パリの南西22kmに位置する600haの庭園
- ・ルイ14世が造園家アンドレ・ル・ノートルに造らせた幾何学模様が特徴のフランス式庭園。
- ・1661年に建設が開始され、1700年に完成
- ・ヴェルサイユ庭園に見られるフランス式幾何学的造園は、その後各地の宮殿庭園の模範とされ、ヨーロッパ全土に広がる。

ペテルゴーフ(ロシア)

- ・ロシア・サンクトペテルブルクの南西約30kmに位置
- ・ピョートル大帝が「夏の離宮」として建設
- ・噴水、池泉、カナルなど多彩な水景が演出され、「噴水の庭」として知られている。
- ・1714年に建設が開始され1723年に完成

ゲエル公園(スペイン)



- ・スペイン・バルセロナにある15haの公園
- ・アントニオ・ガウディの代表作の一つ
- ・もともとは分譲住宅で、1900年から1914年の間に建造された。60軒が計画されていたが、結局売れたのは2軒でガウディ本人と発注者のエウセビオ・ゲエル伯爵であったという。
- ・1922年に市の公園として寄附されている。

2. 公共空間の修景事例

芝生、並木、花壇、彫刻、噴水、舗装、看板



チューリヒ(スイス)

3. 公共空間の活用事例

オープンカフェ

- ・パリのカフェテラスは1世紀の歴史を持つ
 - ・条例により、公共空間利用のルールと利用料金を設定
 - ・「開放型テラス」と「閉鎖型テラス」の2種類がある。
 - ・パリ市全域で開放型テラスが10万か所、閉鎖型テラスが2,500箇所
 - ・公共空間の使用料は、年度毎にパリ市議会で決定し、パリ市の税込総額の約8%に相当
- 引用文献：「公共空間の活用と賑わい利用」

ストリートパフォーマンス

【ヘブンアーティスト事業】

東京・丸の内仲通り

- ・東京都の文化政策
- ・2002年9月から開始
- ・審査会に合格したアーティストにライセンスを発行し、公共空間等を活動場所として提供
- ・投げ銭は可能

物販



ブリュッセル(ベルギー)

東京・東京国際フォーラム広場

【ネオ屋台村】

- ・昼時に持ち帰り用ランチを販売する移動販売車タイプの屋台
- ・2003年より展開
- ・メニューの豊富さ、低価格、日替わり性、車両での営業のため設営・撤去が容易などが特徴

展示

4. 水辺空間の修景・活用事例

クライストチャーチ(エイボン川)

- ・街の中央部を蛇行して流れるエイボン川は、水の透き通った美しい川で、両側は美しい芝生と緑の木々が茂っている。
- ・英国風の「パンティング」と呼ばれる舟遊びはクライストチャーチの名物

パリ(セーヌ川)

- ・セーヌ川はパリ市内の中央を東西に流れる川
- ・川辺にはノートルダム大聖堂やエッフェル塔など、多くの歴史的建造物が建ち並び、32ある橋も個性的
- ・数多くのクルーズ会社がセーヌ川巡りのクルーズを運航

シンガポール(シンガポール川)

- ・シンガポール川が都心の流れ、川に面した古い倉庫跡地を再開発したポートキー、クラークキーは密度高い水辺の賑わいをみせている。

サンアントニオ(サンアントニオ川)

- ・テキサス州南西部に位置
- ・川辺を中心に開発が行われ、サンアントニオ川本流から切り離れた蛇行部分にコの字型の延長約2.4kmの遊歩道「リバーウォーク」を整備
- ・現在、年間1000万人が訪れる長期滞在型観光都市

広島市(太田川)

- ・太田川デルタ上に発達した都市
- ・平成15年に「水の都ひろしま」構想を策定
- ・国の「河川利用の特例措置」を活用し、「オープンカフェ」や「コンサート」など、河川空間の利活用の促進に向けた取組を実施

雁木タクシー

- ・市内に約400箇所ある雁木(水辺に下りていく階段)を水上交通の船着場として活用する水上タクシー
- ・NPO法人雁木組が運航

サマーフェスタ カヌー教室 水面上映会 船上コンサート

講演を踏まえての議論

パリの税収の8%がオープンカフェからの収入だとは驚いた。導入できるものはしていけばいいのではないかと。

現在、国土交通省から運用指針が出て、オープンカフェは試行として全国で行われている。そのうち法改正を含め日本でもできる状態になるのではないかと期待する。

シンガポール川やサンアントニオ川の川辺の事例は、見に行ったことのある人も幾人かいた。観光およびリゾートのために整備しているのだが、人を引き付けられる水辺の例になることと思う。

外国の庭園においても、借景を使ったみごとな例があるのは驚いた。当時の権力をもって莫大な費用を使って整備しているのが感じられる。

舗装の華やかな例はあまり見かけない。図と地の関係で、目立たせるものは花など他にあるということで、どんこ石程度のところが多いのではないかと。

現在、水不足が世界で言われてきているが、その水を使って美観形成のために緑を作ることとの矛盾があるのではないかと。

所感

繁氏の写真の豊富さと美しさに圧倒された2時間だった。意見交換も頻繁に行われ、皆さんの興味もかなり惹かれていたことが分かった。

また広島市の宣伝もきっちりしていただいた。

また新しい場所に旅行されると思うので、新着情報をいつかまた聞いてみたいと思う。(文責：福馬 晶子)



第3回都市サロン(2008年度)

テーマ: 公民連携プロジェクトへの取組

- PFI / PPPファイナンスを中心に -

日時: 平成20年9月16日(火) 19:00~21:00

場所: 広島市文化財団アステールプラザ 4階 会議室

講師: 武田 浩氏(日本政策投資銀行)

主催: (社)日本都市計画学会 中国四国支部

参加者: 13名

「公民連携プロジェクトへの取組」という題目で、日本政策投資銀行 武田 浩氏にPFI, PPPファイナンスを中心に講演していただいた。

氏は、日本開発銀行(現日本政策投資銀行)に入学して、本店、大阪支店、岡山事務所を経てドイツ政府系金融機関に派遣され、帰国後は、(財)日本経済研究所にて、内閣府PFI調査、岡山県等のPFI調査、欧米石油メジャー調査、札幌都市圏産学官連携調査などを担当され、九州支店ではPFI審査委員を4件担当され、PFI・PPPの講師も国土交通省をはじめ数十回されてきている。現在は、本店の公共ソリューション部で公民連携分野(PFI, PPP等)の担当課長に就任されている。そのため、PFI, PPPの分野で10年のキャリアを持っている方に講演をしていただいたことになる。



しかして、本都市計画サロンの「少人数で気軽に都市計画について話し合う」という意図に賛同していただけるか、企画段階でもとても気になったのだが、気軽に引き受けてくださり、実際、サロンとして、活発な意見が交換される有意義なものとなった。

1. 講演の概要

PFI(Private Finance Initiative)は、公共施設等の建設、維持管理、運営等を、民間の資金、経営能力および技術的能力を活用して行う手法で、民間資金等の活用により、国や地方公共団体等が直接実施するよりも効率的かつ効果的に公共サービスを提供できる事業について適用するもの、PPP(Public Private Partnership、「公民連携」とは、官民パートナーシップ(協働)による公共サービスの民間開放を示す。広義のPPPの中にはPFIも含まれている。

PFIについては、法整備が行われ、脚光を浴びていることから、全国で総事業数318件、中国地方では26件が行われている(2008年7月31日現在)。

メリットとしては、行政で100%行うよりも、行政、民間企業、金融機関などのそれぞれの専門分野にリスクを配分することにより、リスクが分散され、圧縮できるとのこと。ただ、公共と民間の相互の信頼関係の上に成り立っているため、長期的に信頼関係を保っていくことが重要になる。PFIへの公共のかかわり方としては、当初の企画の

ちは、設計・建設・運営を一括して民間に任せ、その後の監視(モニタリング)を担当するということになる。

PFIの基本的な契約形態としては、公共施設の管理者と、株主が出資する事業会社(SPC)が事業権契約を結び、当該事業については、事業会社がコンソーシアムに参画する各企業から出資を受けたり、各企業と委託契約を結んでいくこととなる。金融機関は、事業会社とは融資契約を結び、公共とは直接契約を結ぶ例が多い。

PFIの効果としては、民間の創意工夫による効率性の向上(VFM)が図られ、トータルコストが圧縮されること、低廉かつ良質な公共サービスが提供され、民間の事業機会の創出を通じた経済活性化などがあげられる。

PFIの仕組みの類型としては、公共サービス購入型として、公共が民間の提供するサービスを購入するもの(例: 熊本市・岡山県の保健福祉施設、美弥市の社会復帰促進センター(刑務所))、独立採算型として、公共からのサービス購入料がなく、テナントの賃貸料や一般利用者の利用料などから採算をとるもの(例: 東京国際空港国際線地区旅客ターミナルビル)と、の折衷型(例: 尼崎の森)がある。

PFI以外のPPPでは、民間に定期借地権で市有地を賃貸し、収益施設と共に公共施設を建設させ、その公共施設部分について市が借り受けるといった事例(横浜市権太坂三丁目プロジェクト)、山梨県・旧石和町で公営病院を民間移管し、経営を黒字化したうえで建て替えを行う事例、長野県営ガスの民営化の事例など、民営化、民間譲渡の事例が紹介された。

また、PFI事業等で活用されるプロジェクトファイナンスについては、スキーム形成のために一定のコストが必要になるといったデメリットはあるものの、プロジェクトに対する融資であるため、親会社への遡及は限定的になり資金調達手段の多様化が図られるというメリットがあり、ここ数年、全国でも多くの事例が出ているとのこと。総じて、公共・民間・金融機関のそれぞれのプレーヤーのモチベーションと最適なバランス構築が重要とのこと。金融機関のコンサルティング機能をご活用くださいとのことだった。

2. 講演を踏まえての議論

東広島市のLRTにPFIを活用できないか、との問いに、10年くらい前に岡山で路面電車活用のプロジェクトに関わったということになった。公共側が現在の車社会の中で路面電車を活用するという決断を行う勇気や民間と対話する努力が重要であり、公共側に決断できるトップと、民間の方々と対話できる現場の担当者が必要だ。

収支の検討としては、実際の需要想定(利用者数、料金等)公共側の補助、土地代を含めた投資負担の軽減などを検討する必要がある、公共と民間で、ハード・ソフトの両面でどこまでを負担しあうかについて考えなければならないとのことだった。また、リスクを含めて事業を想定し、20年程度で回収できるものでないと、金融機関の関与も難しいのではな

いかということだった。

ちなみに、ドイツでは路面電車をはじめとした公共交通においては公共側の役割が大きい。

そのほか、以下の質問があり、適宜意見交換を行った。

- ・最近のPFIでは、合併特例債を使ってファイナンスが不要なDBOにするという事例が増えている。
- ・広島市はなぜPFIはないのだろうか。
- ・民間の土地に学校を建てたいという件があり、学校法上土地建物は自己持ちの原則があるとのことで断念した経緯があったが、どうしたらよいか。

3. 所感

PFIという手法は、現在もてはやされている感はあるが、公共と民間が長期間にわたって、信頼関係を保ち、契約でそれぞれの立場と責任を明確にしながらか進めていくものとのこと。

事業には採算がつきもので、株主、事業会社、コンソーシアムを構成するそれぞれの企業のリスクも加味しなくてはならないので、実際には内部的にも流動的な部分もあるのだらうと察する。

しかし、その内包する複雑性を含めて、目的会社を作って取り組むというシンプルさは、市民に「その事業はいくらで、その結果このサービスは成り立っている」ということを示し、企業努力をするという透明性と合理性は買うことができると思う。

今後、それぞれの事業がどのように維持されていくかは分からないが、ひとつの手法として、今後も残っていくのではないかと考えている。

また、PPPを含めた民活については、民でできるものはどんどん民でやっていけばいいと考える。ただし、実際に管理運営をする場合、しっかり区分けをしておかないと、公と民の間でのせめぎあいがストレスになるので要注意だと感じた。

(文責：福馬 晶子)



第2回幹事会(2008年度)

日時:平成20(2008)年7月26日(土) 13:30~15:10

場所:コンフォートホテル広島 2階会議室

出席者:支部長 松波
副支部長 近藤、高井
幹事 阿部、大谷、佐伯、佐藤、高塚、
田村、塚本、森山、山下 委任4名
監査役 藤岡、安永

<議題>

議題1 各委員会の活動計画の具体化(総務委員会、企画研究委員会、学術委員会)

議題2 支部連携行事の事業報告・開催計画

議題3 支部への調査研究事業委託について

議題4 その他

本部からの連絡等

支部予算の執行について(繰越金の処理等)

次回の幹事会の開催について

<議事>

議題1 各委員会の活動計画の具体化

【総務委員会】:佐藤委員長より

委員会の構成について、新任1名を加え10名とする(承認)

日本建築学会中国支部主催の2事業について、後援を行う(報告事項)

「水辺の景観まちづくりシンポジウム」について、日本建築学会中国支部環境工学委員会と共催する。但し費用支出は無し。(承認)

【企画研究委員会】:山下副委員長より

委員会の構成について、新任1名、退任6名の計27名とする(承認)

第1回幹事で承認済みの2008年度事業計画について、具体的なスケジュールを報告

【学術委員会】:佐藤総務委員長より代理報告

委員会の構成について、一部未定者がおられると思うので、藤原先生に再確認する

学術講演会について、広島大学と共催予定。詳細は藤原委員長に一任(承認)

議題2 支部連携行事の事業報告・開催計画

山下幹事より、事業報告。続いて田村幹事より、10/4(宇部)の開催計画を説明

最終事業となる宇部でのシンポジウム終了後、支部連携行事の総括(記録の編纂など)をどうするかについて、松波支部長及び山下幹事(実行委員会)で検討する。

議題3 支部への調査研究事業委託について(藤岡監査役より)

支部としての総括(大会での報告、シンポジウムの開催など)が必要である。今年度の途中で行う案や、区別のまちづくり構想がまとまった段階で実施するなど、いろんなやり方が考えられるが、実施方針について受託業務の委員会で検討する。(承認)

議題4 その他

本部からの連絡等

佐藤幹事より、学会の概要(配布資料)について説明

支部予算の執行について(繰越金の処理等)

支部連携行事は、本年度の2事業だけでは剰余金ができるが、記録の編纂をすれば、ほぼ収支均衡と思われる。

調査研究事業受託に係る支部への入金2ヵ年で140万円程度)の使途について、今後幹事会で検討する。基本は短期に消費するのではなく、時間をかけて活用することであるが、現状の予算がタイトという指摘もあるので、当面の事業予算を少し余裕を持ったものにする、支部調査研究事業関連の事業で活用、3年後の10周年記念事業に使うなどが考えられる。

繰越金が本部交付金を大きく上回ることになるので、会計処理の費目を繰越金とするか、特別会計とするか等の扱いについて、支部長が本部と相談する。

次回の幹事会の開催について

幹事会は毎年2回開催(第1回目は総会当日)で、今年度も2回分しか予算を取っていないが、必要に応じてメール幹事会と対面型幹事会を使い分ける。集まる必要があれば、対面型幹事会を招集する。これまで調整会議で済ませてきたが、総会前に開催することが望ましい。

広島以外でのイベント開催に合わせての実施など、必要な開催のあり方について、総務委員会と支部長で検討する。

(文責:佐伯 達郎)

ホットコーナー

ウズベキスタン旅行で見たイスラム建築と都市景観

杉恵 頼寧

2007年11月下旬1週間ほどウズベキスタンに行ってきた。この国は人口約2,650万人、1991年に旧ソビエト連邦から独立した中央アジアの中心的な国である。ウズベキスタンへは、関空から首都タシケントまで、ウズベキスタン航空の直行便があり、日本から8時間半で行ける近くで便利な国である。ウズベキスタンでは、ヒヴァ、ブハラ、サマルカンド、タシケントの4都市を訪れた。これらの都市は、かつてのオアシス都市で、シルクロードの中継都市として繁栄した。1991年までソ連邦に属していたので、国民の多くはロシア語を話し、ウズベク語の文字もロシア語と同じキリル文字が使われている。

夏は猛烈に暑く、冬は寒いと聞いていたが、思っていたより寒くはなかった。だが、天気は予想通りあまりよくなく、曇りの日が多かった。それでも、中世の美しいタイルのイスラム寺院が多く残っていて、毎日感激の連続だった。特にサマルカンドでは、一日中空が真っ青に晴れ、美しい写真が多く撮れた。イスラム教の国であるが、政教分離で、戒律があまり厳しくなく、アルコール類(ワインとビール)も自由だったので、旅行中の食事も楽しかった。

1. サマルカンド

青色のタイルで覆われたイスラム建築が立ち並ぶサマルカンドは、首都タシケントの南西約300kmに位置し、人口約36万人の古都である。古くは、アレキサンドロス大王が遠征してきた当時、この町は既に存在しており、常にシルクロードの中心都市として歩んできた。しかし、1220年のモンゴル軍の攻撃で、壊滅的な被害を受けた。

そのサマルカンドをよみがえらせたのが、モンゴルの血を引くチムール大帝(1336-1405)である。チムール大帝は、滅亡したモンゴル帝国の再興を目指して急速に領土を広げ、彼一代で巨大な帝国を築き上げた。1370年サマルカンドを帝国の首都に定め、その後占領した地域から、多数の建築家、職人、文人、芸術家、学者を集め、この都市を帝都にふさわしく飾りたてようと大規模な建築事業に着手した。この壮大な事業は彼の後継者たちにも引き継がれ、「青の都」と呼ばれる美しい都が創り出された。

チムール大帝の生存中完成した建物の一つに、ピビハニム・モスクがある。モスク(礼拝所)の名はチムールの后ピビハニムの名前をとって付けられた。南北109m、東西167m、中央アジア最大のモスクだが、短期間で建設したために十分な工事がなされず、1897年の地震で大打撃を受け、廃墟と化してしまった。1970年代から修復され、現在では巨大な青いドームがよみがえっている。抜けるような青空に、さらに濃い色合いの青が映え、サマルカンドを代表する都市景観の一つになっている。



(高層ビルがなく、今なお都市景観の中心ピビハニム・モスク)

この旅行で最も印象に残ったのは、サマルカンドのレギスタン広場である。この広場は三つの神学校に囲まれ、ウズベキスタン随一の美しい景観を誇っている。チムールの遠大な構想がチムール帝国の滅亡(1507年)後、150年近くたって、ようやく結実したともいえる。



(三つのイスラム神学校に囲まれたレギスタン広場)

広場に向かって左側(西)に建つのが1420年建造のウルグベグ神学校で、広場では最も古い建物である。この名は、建造者であるチムール帝国第4代君主ウルグベグにちなんで付けられた。神学校は宗教者を養成する学校で、学生の宿舎も学校内に備えていた。学校では、神学だけでなく、高度の科学技術も講義され、卒業生は当時の知識人でもあった。現在、この建物は他の二つの神学校と同様、神学校として使われておらず、その一部は土産物店になっている。



(ウルグベグ神学校の内部、1階は土産物店として活用)

広場右手(東)は、1636年完成したシェルドル神学校である。広場をはさんで、向かいにあるウルグベグ神学校と対称になるよう造られている。シェルドルとは、「ライオンが描かれた」という意味で、この建物の入口アーチには、偶像崇拜を禁ずるイスラムの規律に反し、子鹿を追うライオンが人面を帯びた日輪を背に描かれている。時の支配者が自分の権力を誇示しようとしたためらしい。

れ、サマルカンドから首都の座を奪い、多くのモスクや神学校を建造した。シルクロードの面影を色濃く残すブハラの街並みは、この頃に完成し、今日まであまり変化していないという。

ここでは、旧市街の中心部を歩いての観光であった。泊まったホテルの近くに広い通りがあり、両側に屋根つきの歩道とそれに沿った伝統的な個人商店が軒を連ねている。この通りに足を踏み入ると、その右手(南側)に、1127年に建てられたカラーン・ミナレットと青いドームが見えてくる。カラーンとは大きいという意味で、その名のとおり、高さ46m、ブハラで最も高く、町のどこからでも見えるシンボリック的存在である。ミナレットは尖塔という意味で、塔の最上階の窓から信者にお祈りを呼びかけるのが本来の役割であるが、さらに見張りの塔でもあり、旅人の目印として、砂漠から来る隊商にとって大切な道標でもあった。



(シェルドル神学校のアーチに描かれたライオンの絵)

広場の正面(北)が1660年建てられたティラカリ神学校で、美しい青いドームの下に礼拝堂があり、その天井の美しさは息をのむほどである。ティラカリとは「金箔された」という意味で、その名にふさわしい天井である。細かい遠近法で描かれており、平らな天井にもかかわらず、丸みを帯びて見える。壁面は星と植物、アラビア文字をモチーフにした鮮やかな模様で飾られ、まばゆく輝いている。



(ティラカリ神学校礼拝堂のきらめく天井)

サマルカンドの建築で忘れてはならないものに、レジスタン広場北東の丘に建ち、中央アジア有数の聖地であるシャーヒズィンダ廟群がある。ウルグベク(前出)が建てた入口のアーチをくぐると、チムール帝国ゆかりの人々の霊廟が20近くほぼ一直線に立ち並び、その装飾の多様さ、美しさには圧倒される。



(サマルカンドを見下す丘に建つシャーヒズィンダ廟群)

2. ブハラ

ブハラは、サマルカンドの西数百キロメートルに位置し、周辺のオアシス都市とともにシルクロードの交易路として栄えてきた。16世紀後半ブハラ・ハーン(王)国が建設さ



(ブハラのシンボル、カラーン・ミナレットと同モスク)

それに隣接しているのが、青いドームを有するカラーン・モスクである。名前が示すとおり、非常に大きな礼拝所で、サマルカンドのピビハニム・モスクに匹敵し、1514年建造された。

商店街の突きあたりは交差点になっており、タキ・サンガランがある。タキとは、大通りの交差点を丸屋根で覆ったバザール(市場)のことで、関所の役割もあった。丸屋根は高く大きく、外光が入りやすいようにたくさんの窓が付けられている。この周辺には、商店、職人の仕事場、旅人の宿泊所やトルコ式浴場などが集まっており、それぞれが古来の小さな丸屋根になっている。



(現在は土産物店が並ぶタキ・サンガラン)

そこから南へ数百メートル歩くと、旧市街の中心、ラビハウスに出る。ハウスは池という意味で、その周りは、樹齢数百年にもなるような樹木が茂り、昔も今もオアシスの中心として、人々の憩いの場であり、情報交換の場になっている。



(昔の面影が残る現在のオアシス、ラビハウス)

池の東に面して、1622年建築のナディール・ティヴァンベキ神学校が建っている。正面入口の色タイルの鮮やかな絵に目が奪われる。2羽の鳳凰が爪で白い鹿をつかんで、太陽に向かって飛んでいる絵である。太陽の真ん中には人間の顔が描かれている。これは、偶像崇拜を否定するイスラム教の教義に反し、サマルカンドのシェルドル神学校と同様に、不可解な建物である。



(ナディール・ティヴァンベキ神学校入口アーチの鳳凰図)

市の旧市街西に位置するサーマーニ公園の中に、イスラム初期の建築様式で、1925年に発掘されたイスマイル・サーマーニ廟が保存されている。これは913年から943年にかけて造られた中央アジアに現存する最古のイスラム建築である。大きさは9m四方で、日干し煉瓦を積み上げ、半球ドーム型の屋根の単純な構造だが、壁面を日干し煉瓦だけで、さまざまな模様積み上げているのは見事で、陰影があり、当時の建築家の技術と美意識に驚かされる。



(日干しレンガの模様が美しいイスマイル・サーマーニ廟)

3. ヒヴァ

ヒヴァは、首都タシケントの西約750kmにあり、かつては二つの城壁で守られていた。内側の城壁の中はチャン・カラ(内城)と呼ばれて、国王の宮殿やハーレム、モスク、神学校、廟などが建てられた。その町がそのまま残され、中世にタイムスリップしたような感がある。現在この内城全体が「博物館都市」になっているが、ホテル(神学校を改造)、バザール(らくだの隊商宿を改装)も混在し、住民が今も生活している史跡ゾーンである。



(厚い城壁で囲まれた中世の街並みと新市街)

内城は、東西約450m、南北約650mで、高さ8~10m、厚さ6m、長さ2,250mの城壁に囲まれた小さな町である。西門と東門を通っているメインストリートを中心に歴史的建物の大半が集まっている。西門に入ってすぐ視界に飛び込んでくるのが、青と緑と白のタイルで飾られた未完成のミナレット、カルタ・ミナルである。1852年この地方で最も高いミナレットを目指して建設が始められたが、当時の国王がペルシャ遠征中に戦死したため、工事は中断されたという。基礎部は、直径14.2mあるが、高さは26mしかないため、カルタ(短い)と呼ばれている。



(ジュマ・ミナレットを背景としたカルタ・ミナル)

カルタ・ミナルの向かい側の一角が、17世紀に建てられた「古い宮殿」キョフナ・アルクである。その中で、特筆すべきは謁見の場と夏のモスクで、中央アジア独特の建築様式であるアイヴァンが採用されている。アイヴァンは、戸外に向かって大きく開いたテラス風の空間で、屋根がかかっている。ここでは、往来する使節などの謁見のため、玉座として使用された。前面は2本の木柱が建っている。



(「古い宮殿」内のアイヴァン、謁見のための玉座に使用)

メインストリートのほぼ中央付近にジュマ・モスクとミナレットが建っている。創建は10世紀で、幾度も修復を重ね、18世紀に今の形になった。11世紀後半から13世紀中頃まで栄えた王朝の建築様式を残しており、彫刻のある木柱が212本、約3m間隔で建てられ、梁を支えている。そのうち4本は、10~11世紀頃のもので、最古の木彫りとされている。隣接するジュマ・ミナレット(前出)は、42mの高さである。



(ジュマ・モスクの彫刻された木柱、手前が最古のもの)

4. タシケント

タシケントは、215万人以上の人口を抱える大都市で、中央アジア唯一の地下鉄が走り、「中央アジアの首都」とも言われる。市内は、大まかに旧市街と新市街に分けることができる。新市街では、真っすぐ延びる道路に、やたらと大きいビルが連なり、およそシルクロードの印象からかけ離れた近代的な都市である。これは、19世紀中頃から帝政ロシアの支配が強まることによって、ロシア人の入植が続き、ソ連風の都市改造が推し進められたものと思われる。

新市街の中心はチムール広場で、現在ここには、新生ウズベキスタンのシンボルともいえるチムールの騎馬像が建っている。チムール大帝が手を伸ばす方向の大通りは、「ブロードウェイ」と呼ばれ、モール(歩行者天国)になっている。ここからは、ちょうど道路の真ん中にチムール騎馬像が見え、視覚的な効果を考えて像の配置と言える。

このようにチムール像をいろいろな所で見かけたが、いずれも人々が集まりやすく目立つ所に立っている。1991年の独立後、国威発揚のためにチムールを活用した国造りが行われているような印象を受けた。



(「ブロードウェイ」のモールから見たチムールの騎馬像)

チムール像と反対方向に歩いていくと、公園に面した交差点で人だかりができていた。そこでは、似顔絵を描く人達が客を待っており、また複製画や土産のミニチュア人形などが売られていて、多くの通行人が集まっていた。なんとなく素朴な感じがして、ほっとする光景であった。



(似顔絵を描く人達や複製画の周りに集まって来た人々)

この近くに、1947年完成したナヴォイー・オペラ・バレエ劇場がある。この劇場は、第二次世界大戦後、タシケントに抑留されていた旧日本兵などの捕虜に、強制労働で造らせた建物の一つである。「日本人が建てたこの劇場は、1966年の大地震の時にみぶくともしなかった」と、地元では高く評価されているようである。



(日本人捕虜によって建てられたナヴォイー劇場の正面)

終章：サマルカンドのナン(パン)は美味しいということである。分厚くて、大きく、もちもちとした食感が特徴である。帰国前日、泊まったホテル近くのバザールで一つ買い、土産として日本へ持ち帰った。何の付けあわせがなくても、評判どおりの美味しさで好評だった。

参考書：シルクロードと中央アジアの国々、ダイヤモンド社

会員紹介

石村 壽浩(いしむら としひろ)

ランドブレイン株式会社

略歴

- ・1977年生まれ 広島県福山市出身
- ・2002年 山口大学大学院修士課程修了
- ・2002年 ランドブレイン(株)広島事務所 現在に至る
- ・2008年 山口大学大学院博士後期課程修了：博士(工学)

研究活動

地方都市における
中心市街地の衰退や
人口・開発の郊外へ
のスプロール問題に
着目し、土地利用に
関する研究に取り組
んでいます。人口10
万人以上の非線引き



AURG 2008 in KOREA

都市(宇部市、山口市)の郊外の土地利用問題に関する研究にはじまり、2000年の都市計画法改正による線引き制度廃止都市や地方工業都市を対象に、広域的な土地利用コントロールに関する研究に取り組んでいます。都市計画制度面からの土地利用方を提案していきたいと考えています。

業務経歴

都市政策、土地利用、住環境の分野を中心に、政策立案から計画・事業実施に至る一貫した流れで取り組んでいます。業務に従事して7年目になりますが、総合計画や各種マスタープランなどの業務をきっかけに、各地域で提案してきた内容が、都市整備の具現化や地域の活動などにつながりつつあります。そこに、まちづくりの楽しさを感じながら日々の業務に取り組んでいます。

今後の抱負

土地利用から生活空間へ

都市計画の目的は、そこで暮らす人々の住環境を如何に計画的に維持・改善しながら、環境を整えていくかにあると思います。研究や業務では、広域的な計画や土地利用方針に係ることが多いですが、平面的な都市計画ではなく、常に都市計画が及ぼす建築的空間やそこで展開される活動をイメージすることを基本スタンスとして、計画づくりに携わっていきたいです。

人と人のつながり

まちづくりを進めていく上では、人と人とのつながりが重要であると感じています。学会活動を通じた研究者や技術者の交流や、地域の人々との関わりを深めながら、まちづくりのネットワークを深めていき、知恵と技術で社会に貢献していきたいと考えています。



ワークショップの様子

今後の活動計画

支部連携行事 中国・四国リレーシンポジウム「公共空間とまちづくり」(第7回) & 現地見学会：宇部市

テーマ：「それぞれのまち、それぞれのすがた」

日時：2008年10月4日(土)13:30~17:00

終了後懇親会を実施予定

場所：宇部市文化会館 研修ホール

話題提供：「最近の公共空間整備」

石井 裕 氏(宇部市まちづくり推進課 課長)

パネルディスカッション

パネリスト：石井 裕 氏(宇部市まちづくり推進課 課長)

(アウチ順) 坂本 紘二 氏(下関市立大学 学長)

佐藤 俊雄 氏(中国地方総合研究センター地域計画研究部 部長)

脇 和也 氏(宇部日報社：代表取締役専務)

コーディネーター：田村 洋一 氏(山口大学)

第2回都市計画研究会

テーマ：「中山間地域の”維持”・”管理”政策」

日時：2008年10月18日(土)14:00~16:00

場所：コンホートホテル広島 会議室

講師：塚井 誠人 氏(広島大学大学院工学研究科准教授)

シンポジウム 水辺の景観まちづくり

日時：2008年10月25日(土)13:00~17:00

場所：広島工業大学広島校舎 501号室

(広島市中区中島5-7)

第1部：基調講演「景観から考えるまちづくり」

上山 肇 氏(江戸川区役所)

第2部：「水辺のまちづくりの実践」

「源兵衛川暮らしの水辺」岡村 晶義 氏(アトリ工鯨)

「防災空間としての水辺」坪井 壺太郎 氏(明治大学)

「洪水対策と親水空間づくり」市川 尚紀 氏(近畿大学)

「河川の多様な利活用」大橋 南海子 氏(まちづくり工房)

「水の都ひろしまプロジェクト」新上 敏彦 氏(広島市)

総括：村川三郎 氏(広島大学)

主催：日本建築学会 中国支部 環境工学委員会

共催：日本都市計画学会中国四国支部

後援：空気調和・衛生工学会 中国・四国支部

【今後の活動計画は、次のページに続きます】

フォーラム'08 岡山県備前県民局 2008 年度協働事業

テーマ：「公共空間・笑顔の景」

日時：2008年11月21日(金)13:30~17:00

場所：岡山県立美術館ホール(岡山市天神町8-48)

講演：北原 理雄 氏(千葉大学大学院工学研究課 教授)

国吉 直行 氏(横浜市都市デザイン室 室長)

パネルディスカッション

パネリスト：北原 理雄 氏(千葉大学大学院工学研究課 教授)

国吉 直行 氏(横浜市都市デザイン室 室長)

西植 博 氏(国土交通省)

加藤 源 氏(都市環境デザイン会議)

山崎 学 氏(広島カフエテラス倶楽部)

コーディネーター：阿部 宏史 氏(岡山大学 教授)

主催：まちづくり塾

共催：岡山県備前県民局協働推進室 都市環境デザイン会議中国ブロック

後援：岡山県、岡山市、日本都市計画学会中国四国支部、岡山県建築士会、公共の色彩を考える会、朝日新聞社、毎日新聞社、山陽新聞社、山陽放送、岡山放送、せとうち放送、Oni ビジョン

第3回都市計画研究会

テーマ：「都市郊外部における生活交通とまちづくり」

12月実施予定・詳細は調整中

2008 年度学術講演会

テーマ：「限界集落と地域経営」(予定)

日時：平成20年12月6日(土)14:00~17:00

場所：広島国際大学国際教育センター
(広島市中区幟町1-5)

講演：「限界集落の取り組み」(予定)

安藤 周治 氏(NPO法人ひろしまね代表理事)

「地域経営」(予定)

小林 潔司 氏(京都大学大学院工学研究科 教授)

第4回都市計画サロン

テーマ：調整中

日時：2008年12月20日(土)14:00~16:00

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ(予定)

話題提供者：武内 和彦 氏(都市計画学会会長)

編集後記

このニューズレターも第20号の発行を迎えました。5年間にわたり会員皆様のご協力のもと、最新の情報をタイムリーにお届けすることができたことと思います。これからも引き続きご愛顧をお願いします。

ところで暑かった夏もいつの間にか過ぎ、朝晩は肌寒く秋を感じる時節になりました。スポーツの秋、広島東洋カープとサンフレッチェ広島が、広島を盛り上げています。サンフレッチェ広島は早々とJ1昇格とJ2優勝を決め、広島東洋カープはクライマックスシリーズに向けて大奮闘中です。また51年の歴史に幕を閉じようとしている広島市民球場は、最終戦となった9月28日まで8ゲーム連続で入場券が完売となるなど、連日約3万人の歓声が球場に響きわたりました。私も久しぶりに家内と一緒に球場まで足を運びましたが、あの狭いスタンドが熱気を醸し、名残惜しいように思えました。

新しい球場は来春のオープンに向けて JR 広島駅近くに急ピッチで建設されています。新幹線側に大きく開いたデザインと、車窓から見えるグラウンドの芝生は、広島を訪れる人たちのアイストップになると思われます。まさに広島の新しいランドマークが誕生しようとしています。大リーグを参考にして計画された新球場は、左翼101m、中堅122m、右翼100m、観客席も大リーグ球場並みの広さを確保し、ゆったりと観戦が楽しめます。また砂かぶり席やパーティフロアー、テラスシートなど楽しませてくれる趣向が凝らしてあります。ヒロシマ復興の象徴でもある現球場が姿を消すことは残念ですが、新しい球場が広島を訪れる人を招き、まちづくりに新しい息を吹き込んでくれると思います。(周藤 浩司)



編集委員：周藤浩司(編集長)、石村壽浩、佐伯達郎、佐藤俊雄、高田禮榮、長谷山弘志、福馬晶子、宮迫勇次、安永洋一郎、山下和也